

2022 年度 帰国隊員支援プロジェクト 実施完了報告書
(協力活動) 調査・研究)

提出日:2023 年 10 月 16 日

氏名:笹瀬 正樹

プロジェクト名称: パプアニューギニア KAMISHIBAI プロジェクト

実施国:パプアニューギニア独立国

実施期間:2023 年 6 月 6 日～2023 年 7 月 11 日

0. はじめに（本プロジェクト実施の背景）

2015 年 1 月から 2017 年 3 月まで、私は JICA 海外協力隊の小学校教育隊員として、パプアニューギニア（以下、PNG）のココボ市の公立小学校に派遣されていた。その際、子どもが本に触れる機会が非常に少ないことを課題に感じていた。私たち日本人は、幼児教育、初等教育の段階から家庭や図書館、教科書などで、様々な絵本や児童書に出会い、物語から教訓を学ぶことも多い。例えば、小学校 2 年生の教科書に載ることの多い「スイミー」の物語からは、「役割」や「協力」を学ぶことができる。

一方、私の活動地 PNG のココボ市内のほとんどの学校には図書館が無く、あっても児童が自由に本を読むことができない環境であった。図書館に置いてある児童書も、海外から輸入された英語のもので、PNG が舞台のものや、ピジン語の絵本は任期中に見たことが無かった。そこで、現地の課題についての聞き取りをし、子どもが読みやすい現地の生活に即した物語を同僚教員と共に考え、英語及びピジン語（PNG で最も多く話されている共通語）で絵本を制作した。製作した絵本のテーマは「ゴミのポイ捨てと環境保全」「子どもの喫煙」「職業とジェンダー」などがある。

※以下は「ゴミのポイ捨てと環境保全」の絵本の読み聞かせ動画の YouTube リンク

- ・ピジン語版：<https://youtu.be/f3A-KIAR2xc>
- ・英語版：https://youtu.be/3GoWhE1NC_g



配属先の学校や近隣の村を巡回したり、他地域の隊員の配属先の学校を訪問したりして、小学生対象に読み聞かせをしたところ、保護者や、教員、そして児童から非常に好評であった。児童の間では、ゴミのポイ捨てを作中の登場人物の名前を使って注意し合う様子が見られるようになり、教員や保護者から「こんな伝え方があるなんて考えもしなかった」という声も聞くことができた。さらに、活動を通して地域の教育関係者に認知される中で、任期満了を前に市内の企業が興味を示してくださり、「ココボ市の教育のために」と、スポンサーとして 100 部製本し、寄付してくださった。

しかし、周囲の学校に配布したところで任期が終わってしまった上、絵本に関するアンケート調査や、具体的な効果測定も十分に実施できなかった。手応えのある活動だったため帰国後も心残りに感じていたものの、自身の経験不足による不安に加え、PNG は物価が高く、渡航や安全な施設の宿泊にも多大な費用がかかるため、なかなか挑戦に踏み出せなかった。

帰国から 5 年が経った今、帰国後に就職した教育 NGO、その中で経験した JICA 草の根事業の教育専門家としての仕事を通して得た経験を活かし、挑戦に踏み出そうと考えた。そこでこの度、隊員時代のカウンターパートを頼り、再び PNG に渡り絵本を通じた国際協力活動を実施しようと考えた。

1. 活動実施内容概要

青年海外協力隊として 2015～2017 年に活動していた配属先の小学校(活動拠点校)において、児童と教員を対象に絵本の読み聞かせと、効果測定を行った。具体的には、隊員時代に「ゴミのポイ捨てと環境保全」をテーマに製作した紙芝居「ポイポイとゴミおばけ」の物語を、小学校低学年～中学年の児童に読み聞かせを行い、アンケートとインタビューで効果を測定した。(読み聞かせについては、認知拡大を目的としてココポ市内の小学校や病院、市場、国立博物館でも実施したが、時間の都合からアンケートやインタビュー調査は実施していない。)さらに、教員や保護者にもインタビュー調査を行い、現場の声から絵本の改善すべき点や活用可能性を探った。



また、国立図書館や、環境省などの政府機関、図書館の普及を目的に活動する現地 NPO 法人「Buk Bilong Pikinini」の事務所など、関連しそうな機関を訪問し、PNG の児童書や絵本に関する情報収集を行うとともに、現地への普及やコラボレーションの実現可能性も探った。

2. 活動の結果・成果

本プロジェクトは、以下の 2 つの目的のもと活動を行った。

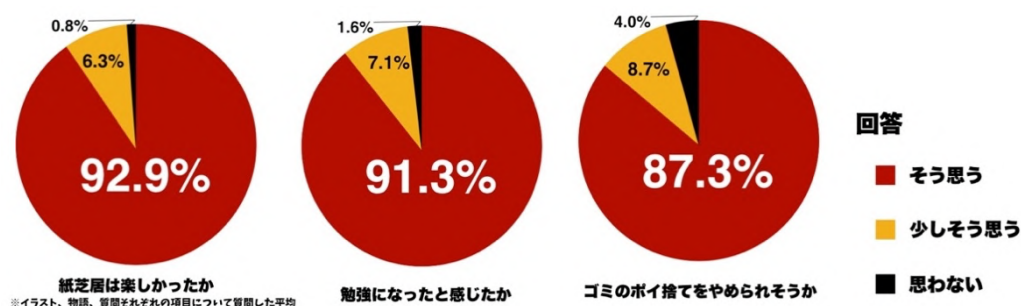
- ・ PNG で製作した絵本の読み聞かせ活動及び、その効果を測定すること
- ・ 今後の絵本に関わる教育支援活動への可能性を探ること

その成果として得られた成果を、「①紙芝居の効果測定について」「②学校現場における当絵本の活用可能性について」「③今後の絵本に関わる教育支援活動への可能性について」の 3 つの項目に分けて以下に記述する。

① 紙芝居の効果測定について

まず、拠点となる小学校の 4 年生 3 クラスの計 127 名の児童を対象に、「ポイポイとゴミおばけ」の紙芝居の読み聞かせを行い、アンケートを実施した。質問項目は、「紙芝居のイラストは楽しめたか」「紙芝居の物語は楽しめたか」「紙芝居の最後に問いに答えるのは楽しめたか」そして、「紙芝居は勉強になったと感じたか」という感想に関する質問が 4 つと、「ゴミのポイ捨てはやめられそうか」という自身の意識に関する質問の、計 5 つの質問に、「そう思う」「少しそう思う」「思わない」の 3 択で答えてもらった。現地の言葉でアンケートを準備し、自分の答えとなる顔のイラストに色を塗る形で回答をしてもらうよう配慮した。

下のグラフは、アンケート結果をまとめたものである。尚、イラスト、物語、問いについての「楽しめたか？」の質問に対する回答に有意な差は見られなかったため、結果は上記3つをまとめ、「紙芝居は楽しかったか」という質問として示してある。



以上の結果より、小学4年生の児童の約9割は、「ポイポイとゴミおぼけ」の紙芝居を「楽しい」「勉強になる」と感じたことがわかる。

さらに、各クラスから5名の児童を抽出し、インタビューを行った。授業前と授業から1週間後に「ゴミのポイ捨てをすることをどう思いますか？」「友達がゴミのポイ捨てをしていたらどうしますか？」等の質問を投げかけ、ビデオで撮影した。結果、授業の前には、回答できずに黙り込んでしまったり、言葉に詰まってしまったりしていた児童が、授業後（授業から1週間後）には、紙芝居の物語を通した学びを活かして回答できる事例が複数見られた。アンケート結果で約9割の児童が「ゴミのポイ捨てをやめられそう」と答えたことから、本紙芝居はゴミのポイ捨てに対する意識の変化にも繋がることが分かった。

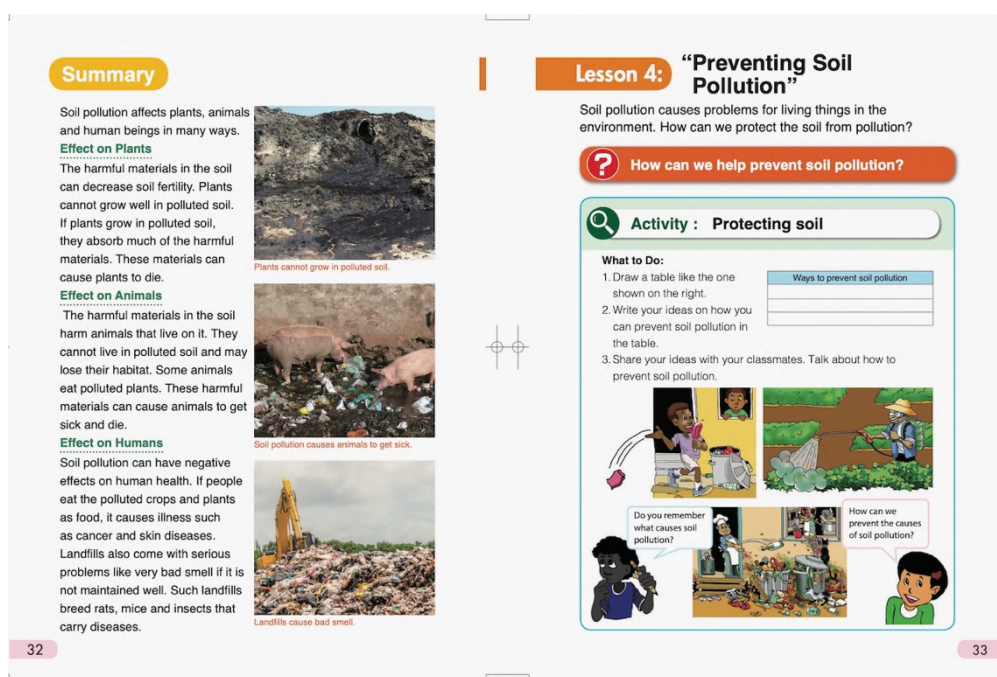


※読み聞かせについては、認知拡大を目的としてココポ市内の小学校（4校）、幼稚園、病院、村落、市場、首都ポートモレスビーの国立博物館でも実施したが、時間の都合からアンケートやインタビュー調査は実施していない。

②学校現場における当絵本の活用可能性について

私の絵本の読み聞かせの後、児童と一緒に聞いていた担任教員に対してインタビュー形式で質問を投げかけ、ビデオで撮影した。質問内容は、「この紙芝居を通して、子どもの行動は変わる（ポイ捨ては減る）と思いますか？」「この絵本を使って、教育活動を実践してみたいか」「この紙芝居は、どんな時や場合に使えると思うか。」などの質問を投げかけ、現場の教育者視点での紙芝居活用の可能性を探った。

インタビューの中で教員から、「子どもたちの反応（表情や笑い声）からも分かるように、とても楽しく学んでいた」「物語を通じて学ぶことで、学習内容が記憶に残りやすい」など、ポジティブなコメントも得られた。また、紙芝居の読み聞かせを教室で聞いていた校長先生より、「ゴミの管理に関する内容は、理科、保健科、生活科、自己啓発科の4つの教科のカリキュラムに含まれており、紙芝居は副教材として活用可能である」との意見ももらうことができた。実際に4年生の理科や保健の教科書の中に、ゴミ処理や身の回りの環境に関する学習内容が掲載されていることも確認した。以上のことから、学校教育の視点からも紙芝居の効果や活用可能性は大きそうである。



出典：National SCIENCE Textbook (Department of Education, Papua New Guinea) 2019年 32-33 頁

また、読み聞かせを実施した3クラスで、後日3名の担任（現地教員）による別の物語の読み聞かせを実施してもらった。現地の教員も問題なく読み聞かせが実施でき、特にベテラン女性教員は、間の取り方や抑揚の付け方、声色の変化などが非常に上手かった。読み聞かせを指導する活動も予定していたが、不要と判断して省いた。彼女のような、ベテラン教員が中心となって、学校内の紙芝居の活用可能性を広げて欲しいと思う。



③今後の絵本に関わる教育支援活動への可能性について

今後、連携や協働をしていける可能性のある機関や団体を探るため、自身の隊員時代の繋がりのある団体や、JICA 海外協力隊の受け入れ経験がある機関、JICA 技術協力プロジェクト実施機関を中心に訪問させていただいた。それぞれでプレゼンテーションを実施し、サンプルとしてラミネート加工済みの紙芝居（もしくは製本した絵本）と、印刷用のソフトコピー（PDF）を寄贈した。プレゼンテーションの内容は以下の通りである。

- ・ PNG の課題と紙芝居を制作した目的
- ・ 紙芝居を活用した授業の教育的な価値
- ・ 日本の教育における児童書や読み聞かせの重要性（学習指導要領を抜粋して提示）
- ・ PNG 政府の開発目標や SDGs とのつながり
- ・ 今回の調査におけるアンケート結果と教員からのコメント



また、説明する中で実際に読み聞かせの実演も行った。

以下、訪問した政府機関や自治体等である。

- A) ココポ/ブナマミ地区 町役場（ゴミのポイ捨てと環境）
- B) 東ニューブリテン州 保健センター（タバコと健康）
- C) ココポ市ビタパカ地区 教員研修（授業とモラル）
- D) PNG 政府 環境省 JPRISM プロジェクト（ゴミのポイ捨てと環境）
- E) PNG 政府 法務省 モニタリング評価局（盗難とモラル）
- F) PNG 国立図書館（ゴミのポイ捨てと環境）
- G) NPO 法人 Buk Bilong Pikinini（ゴミのポイ捨てと環境）
- H) JICA PNG 事務所（読み聞かせ実演は実施せず）

※カッコ内は読み聞かせをした紙芝居のテーマ

各機関で紙芝居を活用した教育を高く評価していただき、a) ココポ/ブナミ地区 町役場、及びb) 東ニューブリテン州 保健センターでは、口約束ではあるものの、ぜひ自身で予算を取って印刷や製本をし、子どもへの教育活動に活用したいとのコメントも頂いた。以下は、一部ではあるが、各機関の訪問の報告である。

A) ココポ/ブナミ地区 町役場（ゴミのポイ捨てと環境）

当町役場は、以前より JICA 海外協力隊や地域住民と共に浜辺のゴミ拾い活動を実施していた。また、廃棄物処理に関する政府事業のパイロット地域になっていたり、職員の中にも日本の大学に修士課程（環境学）の留学予定者がいたりするなど環境に関する取り組みに積極的な印象であった。

職員へのプレゼンテーションで興味を持ってくれた職員の方が中心となり、管轄のココポ地区とブナミ地区の小学校に配りたいと、私や参加職員らの前で宣言してくれた。



B) 東ニューブリテン州 保健センター（タバコと健康）

当保健センターには、コロナ禍前まで JICA 海外協力隊の感染症対策隊員も配属されており、JICA や WHO と連携してフィラリア症撲滅のため技術協力プロジェクトも実施していた。かねてより、イラストを使った視覚的な啓発に興味を持っているとのことで、これまで活用してきたポスター等を紹介してくれた。

職員へのプレゼンテーション後に健康促進担当及び予算担当の方から、管轄の東ニューブリテン州の各保健センターに配布して活用したいとコメントをいただいた。



C) ココポ市ビタパカ地区 教員研修（授業とモラル）

約 200 名が集まる教員研修でプレゼンテーションを実施した。反応が非常に良く、読み聞かせのパートでは、子どもを対象にした時のように大きな笑いが起こった。価値を感じてもらふことにも繋がるが、教員に「使ってみたい」と思ってもらえることが大事だと考えている。小学校での実践の際、インタビューを通じて教員からポジティブな意見をいただいているが、使いやすい教材として認知をしてもらったのではないだろうか。



F) PNG 国立図書館（ゴミのポイ捨てと環境）

国立図書館ではプレゼンテーションの時間とは別に、役員の方々と有意義なディスカッションもすることができた。その中で、PNG には自国で出版された本が少ないという課題意識と、本の大半を輸入に頼っているという現状を聞くことができた。国立図書館自体でも本の出版も行なっているようで、共同で教育的な本を制作するプロジェクトができないかと提案も受けた。また、近い将来、Rachel PLUS（大量の教材を保存した ICT 学習器機）をリモートエリアの学校に配布する計画があるらしく、その中に電子書籍として取り入れたいとの提案もあった。



G) NPO 法人 Buk Bilong Pikinini

PNG の識字率向上に向けた活動をする団体である。図書館の普及や読み聞かせ活動に加え、キャリア教育や障がいへの理解を目的とした絵本の制作もしている。

団体の管理職の方々 3 名との面談の機会をもらい、活動紹介と、絵本を通じた教育についての意見交換も行った。今後に向けた連携の話は具体的には挙がらなかったものの、絵本制作の助言やノウハウを共有してもらうなどの協力を受けられそうである。また、本 NPO が制作した絵本の絵を担当した PNG 人イラストレーターのイラストが（個人的な感想ではあるが）非常に魅力的で、制作する際には紹介をしてもらえることになっている。



H) JICA PNG 事務所

本活動が隊員時代の活動の延長ということで、JICA 事務所にも訪問し、活動報告の機会を得た。その結果、今後 JICA 海外協力隊の学校教育関係や環境教育関係、保健衛生関係の隊員が活用できるよう、必要に応じて事務所で印刷やラミネート加工などをサポートしていただけるよう検討していただいた。後日、大洋州地域廃棄物管理改善支援プロジェクト（JPRISM）を実施する環境省のプロジェクト担当者の方をご紹介いただき、訪問することができた。

企画調査員（ボランティア担当）の方によれば、「ココボ市は他の地域と比べて JICA 海外協力隊のプレゼンスが驚くほど高い」と感じたそうである。現地在住邦人の方々のお話を聞く限り、治安の良し悪しも含めてココボ市は PNG の中でも比較的、協力活動がしやすい地域であると感じた。



以上から、絵本を活用した教育事業、もしくは当絵本自体に興味を持ってくれた機関等は非常に多く、今後の連携・協働の可能性は大きく感じた。

3（申請時に）期待された成果と実際の相違点

申請時に期待していた成果は、対象の小学校において、絵本を通じて「ゴミのポイ捨てが減る」「周りの児童にゴミのポイ捨てを注意できる」など、具体的な行動変容であった。しかし、教育の専門家（静岡大学および北海道大学の各教育学部の研究者の方々）との意見交換を経て、3週間の限られた期間での活動の中で、子どもの行動やゴミの量の変化を測定するのは難しいと判断した。そこで、今回の調査では「行動」ではなく、「意識」の変容に注目することにした。

児童対象のアンケート及びインタビュー調査の結果、環境とポイ捨ての読み聞かせを聞いた子どもたちの意識の変化は明らかになった。「意識」は「行動」の手前の段階ではあるものの、重要なポイントである。

また、教員へのインタビューにより、「複数の教科での活用の可能性」も明らかになったことも期待していなかった成果であった。教科の学習内容を意図して制作をしたわけではないが、「理科」「保健（健康）」「生活」「自己啓発」の4教科で活用できるとの意見が挙がった。実際に、4年生の理科と保健の教科のシラバスと教科書で、制作したテーマと関連した単元を確認した。改善点は発見できなかったが、私の想像していなかった良い点の発見に繋がった。

※以下はインタビュー映像リンク

- ・児童へのインタビュー：<https://youtu.be/3PPbMEw0-8Q?t=447>
- ・教員へのインタビュー：<https://youtu.be/3PPbMEw0-8Q?t=648>

4 活動成果の持続発展性

持続発展性を促進するため、協力隊員として活動していた際の反省を生かして以下の3点に配慮した。

- ア) 学校の先生に読み聞かせを実践してもらう
- イ) 現地の予算で印刷・製本をしてもらう
- ウ) 紙芝居の認知拡大も意識して活動する

- ア) 学校の先生に読み聞かせを実践してもらう

2-②で示した通り、学校内の紙芝居の活用継続性に繋げる工夫として、読み聞かせを実施した3クラスにおいて、3名の現地教員（担任）に別の物語の読み聞かせを実施してもらった。この3名が中心となり、今回学校に寄贈した紙芝居が活用され、読み聞かせを

継続されること願う。また、今後当小学校の校内においては、特に読み聞かせが上手だったベテラン教員を中心に、普及を進めていきたいと思っている。

イ) 現地の予算で印刷・製本をしてもらう

2-③で示した通り、複数の機関で印刷や製本のための予算を取り、教育活動に活用したいとのコメントを頂いた。実際に現地の予算での印刷・製本が叶えば、現地の方々が紙芝居や絵本を「必要」と捉えている証であり、積極的に活用してくれるだろうと考えている。8月末時点では、ココボ・ブナミ地区の町役場より「準備を進めている」との連絡をもらっている。

ロ) 紙芝居の認知拡大も意識して活動する

東ニューブリテン州のラジオ局の協力を得て、州内のラジオ番組とラジオ局の Facebook ページ (<https://fb.watch/nl-qtWfo0h/>) でそれぞれ2度、絵本の宣伝をさせてもらうことができた。その投稿の内容からの情報が記事になり、数日後に全国紙の新聞 (Post Courier) に掲載された。(<https://www.postcourier.com.pg/japanese-volunteer-distributes-books-to-schools/>)



その結果、訪問する先々で本活動や紙芝居の存在、私の名前を知ってくれていた機会が何度もあり、話が早く、非常に活動がしやすかった。



また、休日にはココボの中心にある市場（ココボマーケット）や、元同僚で友人の実家のある隣町ラバウル村(マトピット村)で、子どもたちや保護者の方を集め紙芝居を実施した。ポートモレスビーでは、大使館職員の方からのご紹介で国立博物館の子ども向け文化イベントで、紙芝居を実施させてもらうこともできた。講師の方やイベント参加者の子どもたち、そして大使や大使館職員の方にも活動を知っていただくことができた。

5 苦勞した点、反省点、本活動を通じて得られたこと、学んだこと、教訓等

苦勞した点は、「時間感覚の違い」が想像以上に大きかったことである。協力隊として活動していた際には徐々に慣れ、おそらく任期後半の頃には理解して行動できていたと記憶している。今回、6年半ぶりの活動で当時の記憶も薄れており、活動開始から数日は適応に苦勞した。現地在住邦人の方の話では、特に現在は現地航空会社の運行ダイヤが大きく乱れており、飛行機が飛ばずに数日待たされることも多いという。(今回私は何度か便のキャンセル、オーバーブッキングや遅延によるトラブルがあったが、どのフライトも最低でも一日遅れで到着はできたのは幸運であった。)

現在、私は東アフリカのタンザニアで仕事をしているが、時間感覚の違いやトラブルの多さはタンザニアと比べてもかなり大きかった。また、気候や衛生環境の違いから体調不良等のトラブルも考えられる。教訓として、PNG で活動する際には十分すぎるくらいに余裕を持って活動スケジュールを計画しておくべきである。

一方で、良い意味で私の想像を超えていた点も多々ある。部族の繋がりが非常に強いことによるネットワークの広がりやすさ、逆に、多文化(1000を超える部族)が共存することで培われている新しい考え方を受け入れようとする態度、これまで JICA や在 PNG 邦人が積み重ねてきた日本人への厚い信頼など、PNG ならではの特徴が大きな活動の助けとなった。これらが本プロジェクトの活動を広げ、また加速させてくれたと感じている。

6 自身の今後のプラン、及び本活動の活用予定・計画

今回の活動を通じて、PNG における本活動の需要が明らかになり、連携や協働が可能な機関や団体との繋がりもできるなど、確かな手応えを感じた。今後の展望としては、当初の予定通りの拠点校の教員や地域の教育関係者、そして今回訪問させていただいた国立図書館や NPO 法人 Buk bilong Pikinini と連携をした、絵本を通じた教育支援活動(本活動の延長となる「絵本の製作」や、理数科教育への興味に繋がる「科学絵本の読み聞かせ」等)を考えている。



また、今後は自身が代表を務める一般社団法人 Wakwak for Everyone として国際協力活動続ける予定であり、「公益財団法人三菱 UFJ 国際財団」の助成金(国際交流事業)や、「JICA 基金」「JICA 草の根事業」「外務省 日本 NGO 連携無償資金協力」などのプロジェクトベースのスキームへの応募も検討している。治安や活動のしやすさ、自身の人間関係を考慮し、今後も引き続きココポを拠点として活動をしていく予定である

以上



◀◀ 報告ビデオはこちら

<https://youtu.be/3PPbMEw0-8Q>